

# 子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試み（2） －保育者養成課程学生とプロの演奏家との協働的な取り組みより－

An Attempt to Encourage Children to Play Handmade Musical Instruments Actively (2)  
-Through the Collaboration between the Students Majoring in Childcare and a Professional Musician-

山 本 敦 子  
Atsuko Yamamoto

## （要約）

子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試みとして、第2段階となる今回（2018）は、幼児から小学生低学年までの子どもと保護者を対象に、段ボールでのカホン制作と演奏発表会を保育者養成課程学生とプロの演奏家との協働において実施した。ビデオ、学生の振り返りシート、保護者アンケート等の分析と考察を通し、今回の取り組みは、「子どもの演奏体験を能動的に促す」ことを実現するのみならず、「子どもと音楽との関わり」を有機的に編み直すための視点を学生にもたらしうることが明らかとなった。子ども、学生、講師等による複層的な「音楽アウトリーチ」活動としても、また、カホンを中心とした音楽の「文化的実践としての学び」の機会としても意義深い。今後は実施後の参加者の変容を捉える視点が望まれる。

## （キーワード）

手作り楽器の演奏、保育者養成課程学生、音楽の専門家、アウトリーチ活動、文化的実践

## 1. 課題の所在と本研究の目的

### （1）課題の所在

手作り楽器を用いた「音遊び」と「子どもの歌に合わせた合奏」は保育の場でもよく行われる活動である。現場では保育者と子どもとの安定した関係のもとで、材料収集から制作後の発展的活動まである程度の時間をかけて継続的に進めることができる。ところが児童館において、1回きりのイベントとして保育者養成課程の学生たちが初めて出会う子どもや親子を対象に一斉に推し進めていくとなると、子どもたちが「安心して活動に参加する」「合奏方法を理解する」「活動の楽しさを感じる」「一体感を共有する」ための時間や関係性、音楽実践スキルにどうしても制約が生じてしまう（山本2017,2018）。特に、保育者養成課程学生の音楽スキルは音楽専攻学生やプロの演奏家のように高くはなく、大きな会場で多くの子どもたちを惹きつけるような完成された音楽パフォーマンスを安定的に提供することは難しい。このような限られた条件のもとでも、子どもたちの「作ってみたい」「鳴らしてみたい」という興味や意欲を引き出し、参加者が一体感を共有できるような演奏体験を生み出すにはどのような方法が有効であろうか。

### （2）前回までの取り組み

筆者がまず注目したのは、限られた時間や関係性の条件下でも参加者の需要と満足度が比較的高い、子どもや親子向けのコンサートの実施方法である。そのようなコンサートにおいては、演奏者から聴衆に一方向的に演奏を提供する従来の「鑑賞型」に固執することなく、例えば、演奏者の演奏や進行に聴

衆が何らかの形で関わる「参加型」や、多感覚、とりわけ視覚媒体を利用して聴衆に音楽受容を促進する「視覚型」などの形態が取り入れられている。そこで、上述の課題を解決する糸口として、活動の中心に1冊の絵本を用い、絵本に手作り楽器で効果音を付ける取り組みを通して子どもたちの演奏体験を能動的に導くことはできないか。その演奏体験を子どもたちによる「参加型」のコンサート、あるいは学生と子どもたちによる「協同創造型」のコンサートとして位置づけ、保護者の前で実演することで、限られた条件下でも一体感を伴った豊かな音楽イベントを実現できないか、と筆者は考えた。そして2017（平成29）年、保育者養成課程2年生受講のゼミナールで新しい企画の検討を重ね、幼児から小学生までの子どもと保護者を対象に児童館にて実践を行った。学生の振り返りシートや保護者へのアンケート調査をもとに本実践の意義と課題を検討した結果、「視覚型」「参加型」の方法は当初のねらいを部分的に実現しうるものであったが、発表会に向けて子どもの能動性や取り組みの質をさらに高めるためには、幼児から小学生までの「発達段階」に見合った方法やグループ編成、声や音の行き届く「環境」、身体表現のための「スペース」への配慮などの課題が明らかとなつた（山本2020）。

### （3）本研究の目的

子どもと楽器との出会いと関わりについて、近年の乳幼児の音楽表現研究では、子どもが自己の感覚（筋感覚、視覚、聴覚、触覚）を研ぎ澄まし、運動することによって自分に返ってくる感覚の変化を実感できるような「アフォーダンス」の体験を提供することの重要性を説いている（丸山2016）。一方で、楽器自体の「文化性」にも着目し、「楽器はこれまで長い歴史をかけて洗練され、音が磨き上げられたモノでもあり、文化をもっている」という視点から、子どもが自ら楽器と関わり、その文化的側面を学んでいくために必要な体験として、「演奏を聴く」「（楽器を使って楽しむ身近な他者に）憧れる」「音楽をイメージする／演奏する」「プロの演奏の凄さに驚く、演奏を聴く」の4点を挙げている（村上2016）。中でも「プロの演奏の凄さに驚く、演奏を聴く」体験は、修練された技術をもとに素晴らしい演奏を聴かせる大人たちの姿に憧れ、その音楽文化の実践共同体に参加してみたい、学んでみたいという意識を子どもたちに芽生えさせるきっかけともなるだろう。

前回までの取り組みの課題を、このような楽器の文化的側面に照らし合わせて考えれば、楽器を奏でる大人たちの姿や音楽そのものに大きな憧れを抱けるような演奏の専門家を手作り楽器の活動に起用することは、演奏体験を子どもたちに能動的に促すうえで大きな効果をもたらすのではないだろうか。それはまた、子どもと楽器との関わりを有機的な学びに編み直す可能性を持ち、学生にとっても「楽器との関わりにおける子ども」への新しい見方をもたらすのではないだろうか。先述のように、保育者養成課程学生は高度な音楽パフォーマンスを安定的に提供することが難しいが、学生たちの実践に演奏家が加わることにより、安定的で魅力的な音楽パフォーマンスの提供はもとより、複層的な「音楽アウトリーチ」の活動として学生にも有意義な学びをもたらすことができるかもしれない。

そこで、新しい学年を迎えた2018（平成30）年度の1年生15名受講のゼミナールの授業では、同じ児童館での取り組みに対して、手作り楽器の制作においては種類も豊富で奏法も分かりやすい打楽器系のプロの演奏家を招き、学生との協働で企画実践する試みを新たに行うこととした。次章以降では、本実践の企画内容と実践後の学生の振り返りや保護者アンケートの結果について述べ、本実践の意義と課

題を「音楽アウトリーチ」「文化的実践としての学び」の考え方をもとに考察する<sup>2</sup>。

## 2. 実践までの流れ

### （1）講師選定

本実践を企画するにあたり、講師の選定を行った結果、ラテン打楽器を始めとするパーカッションの演奏家として近隣の地域で精力的に活動している打楽器奏者に出演依頼を行うこととした。講師は大学や音楽教室で子どもから大人までの指導にも携わり、近年では乳児からの親子を対象としたコンサートや、手作り打楽器の制作と演奏のワークショップを行うなど、教育や子育て支援の場でも活躍している。このことから、学生が本活動を進めていくにあたり、特に演奏活動において、子どもや親子がより楽しめるような音響や手法を音楽家としての立場から補助・提供してもらうことができ、それはまた、保育者養成課程の観点からも学生にも有意義な学びをもたらすものと考えた。

### （2）企画の枠組みと楽器選定

講師は大学の特別講師授業制度上、実践当該日のみの参加となるため、それまでの準備段階においてはゼミナール担当である筆者が講師と学生との間に入り、企画内容等の検討、調整を行った。授業の学びとして、学生にイベント全体の運営・進行を任せたいとする筆者の意向をもとに、前半の制作活動の進行や援助は学生が行い、後半の演奏活動の進行は講師が行うこと、子どもたちへの動機づけとしての最初のモデル演奏や制作後の練習・発表会には、学生も講師とともに演奏者として参加させることができた。

楽器の選定については、講師がこれまで実践した親子対象イベントでの豊富な経験から、段ボールによるカホン制作を取り上げることとなった。カホンはペルー発祥の木箱型の打楽器であり、ラテン音楽はもとよりスペインの民族舞踊フラメンコにも重要な伴奏楽器となっている。その持ち運びのしやすさや、叩き方次第では低音から高音まで一つのドラムセットのような役割を果たすことなどから、今ではストリートミュージックにも用いられている。ジャンルを問わずビート感あふれるリズムを自由自在に紡ぎ出す演奏家の生の姿は、子どもたちを「プロの演奏の凄さに驚く、演奏を聞く」「（楽器を使って楽しむ身近な他者に）憧れる」体験へと誘うのに大いに適していると言えるだろう。また、楽器の上部に座って側面を叩くという単純な奏法も、限られた時間の中で子どもたちを演奏体験にまで促すのに相応しいと考えた。

### （3）参加対象者について

段ボールによるカホンの制作は至ってシンプルである。厚みのある段ボールの四面の内の一面（打面と反対の面）にサウンドホールとなる穴を開け、打面の裏側には音色効果のためのスナッピーを取り付ける。ガムテープで段ボールの底や上部を留めると完成となる。小学校中学年以上であれば子ども一人で仕上げることができるが、幼児から小学校低学年の子どもは部分的に援助が必要となるため、本実践では参加対象を「幼児から小学生までの子どもとその保護者」とした。また、本実践の特色となる発表会の取り組みにおいても、保護者が「見守り役」あるいは「お客様役」を務めることで、子どもたちもより能動的に意欲的に演奏に取り組めるのではないかとの意見を講師から得た。

#### (4) 準備段階における学生の取り組み

本実践の企画や準備のために要した授業時間は 90 分の授業 5 コマ分である。本実践の取り組みに際しては筆者が到達目標を次のように設定し、学生に共通理解を図った。

①地域の子どもや親子を対象としたイベントの企画、実践を通して、保育者としての資質・技術の向上につなげる。

②音楽の専門家による音響や手法のサポートのもと、子どもにとって豊かな音楽体験の場となるよう、専門家と協働的に取り組む。

事前に筆者が講師と立てた企画の枠組みに基づき、本実践のために選出されたリーダー 2 名を中心となり準備を進めていった。制作活動においては、実際に授業の中で学生自らが段ボールのカホンを試作することで、子どもや親子の作業可能な範囲を確認し、時間的、技術的に不可能だと思われる作業については、事前に学生たちで準備、作業を済ませておくこととした。このほか、リーダー 2 名による司会進行や制作方法の説明、案内チラシの作成、パワーポイントによる歌詞カード制作、ピアノ伴奏など数名が役割を担い、最終週にはリハーサルを行って当日の進行を全員で確認し合った。企画内容の詳細は以下の表 1 のとおりである。なお、実践当日は学外授業として授業の 1 回分に含めることとした。

表 1 「親子で作ろう！ダンボールカホン」企画内容

時間	内容	実践者から参加者へのねらい	担当と留意事項
13：00 (15')	・始めのあいさつ ・活動の趣旨説明	①子どもに顔を覚えてもらい、安心して活動に参加できるようにする ②保護者に活動の趣旨の理解を促す	・学生主導 挨拶全員、進行 2 名 カホン全員、ピアノ 1 名 PC 操作 1 名
	【導入】 ・楽器紹介と講師によるモデル演奏 ・講師と学生による演奏「勇気 100%」	①カホンの由来や構造を伝える ②講師の演奏によりカホンの魅力や洗練された演奏技術に触れさせる ③講師・学生のモデル演奏により制作や発表会参加への動機を高める	・学生のカホンをステージに、フロアマットを客席かつ制作場所に設置する ・PP で歌詞カード等を提示
13：15 (45')	【制作】 ・材料配布 (段ボール・テープ・のり・スナップビード・新聞紙・色画用紙・切り紙等) ・方法説明 ・制作援助	①作り方を実演し、手順をつかませる ②制作状況を見守り、子どもが自ら制作できるよう言葉がけや介入の仕方に留意する ③子どもが周りの人との関わりを育めるように必要に応じて取り持つ	・当日までの下作業 ・サウンドホールの位置をマジックで書いておく ・スナッピーを半分に切る ・装飾用材料を人数分準備 ・学生主導 進行 3 名、援助 12 名 ・制作方法をパワポで説明
14：05 (5')	休憩・片づけ	①完成したら片づけ、休憩、演奏の準備に入るように促す	
14：10 (35')	【練習】 ・叩き方の練習 ・リズム練習	①学生は講師の指導に従い、講師の背後（子どもと対面する位置）で練習に参加し、会場の一体感を高める	・講師主導 ・子どもは客席で練習 ・保護者は客席外で見学
14：45 (10')	【発表会】 ・全員での演奏 「勇気 100%」	①学生は講師の指導に従い、子どもたちと発表会に参加することで、発表会の場を盛り立てる	・講師主導 ・子どももステージに移動 ・PP で歌詞カード等を提示
14：55 (5')	・終了のあいさつ ・アンケート回収	①達成感を感じさせる言葉をかける ②親子が去るまで雰囲気を保つ	・学生主導（進行 2 名） ・アンケート回収箱を設置
15：00	終了・片付け		

### 3. 実践当日の様子

#### (1) 導入

2018 年 1 月 27 日（日）に地域の大型児童館を会場に、幼児から小学生の子ども 35 名と保護者を対象に実践を行った。開始前に学生と筆者、講師とで企画内容の最終調整や環境構成を行い、オープニング

演奏「勇気 100%」に必要な二つのリズムパターン（譜例 1・2）を叩けるように練習を行った。学生は講師と顔を合わせても本物のカホンを叩くのも初めてのことであったが、講師の的確な指導のもと学生たちは限られた時間内でリズムを体得し、講師への信頼と協働への態度を形成していった。司会学生の緊張した面持ちで始まったイベントであったが、講師が楽器紹介や学生たちとのモデル演奏を行うやいなや、プロの演奏家ならではの洗練されたリズムとビートに親子も児童館スタッフも大いに盛り上がり、会場全体が一瞬にして楽しい雰囲気に変わった。カホンという楽器の魅力を伝え、子どもたちの「作ってみたい」「鳴らしてみたい」という興味や意欲を引き出すには十分に効果的な導入だったと思われる。



譜例 1 リズムパターンA (4/4)



譜例 2 リズムパターンB (4/4)



図1 制作の様子



図2 練習の様子

## (2) 練習

親子でのカホン制作後、講師主導のもと子どもたちは発表会の練習に移った（図2）。叩き方の基本から 2 種類のリズムパターンの伝授まで、講師は見本を見せながら子どもたちに楽しくわかりやすく指導し、ほとんどの子どもたちが限られた時間内でリズムを叩けるようになった。この間、講師は後ろに立っている保護者にも時折声をかけて会場に笑いをもたらしたりしていた。それはつまり、練習の最中も保護者が見守っていることを子どもたちに知らせ、安心させる効果を持ち、また、子どもたちのしていることに保護者も関心を持たせることで、会場全体で発表会を作り上げていくことにつながっていた。

リズムを叩けるようになった子どもたちに講師が新たに提案したのは、声や体を使ったパフォーマンスを曲の途中で入れてみることであった。例えば、B のリズムの 4 拍目は休符であるので、その部分に高めの声で「フー」という掛け声を入れることを提案した。リズムは 7 回繰り返されるので、掛け声も 7 回分となる。恥ずかしがって中々言い出せない子どもたちを、講師はビートに乗せながら言葉掛けを続けざまに行うことで子どもたちの意欲を喚起した。また同じ場面で、子どもの声を引き出すために学生たちが大きな声を発していたところ、講師は敢えてそれを制し、子どもたち自身に声の小ささを自覚させて大きな声を出させるための環境を作り出した。音楽家ならではの講師のこのような働きかけに、子どもたちも自ずと音楽の世界に引き込まれ、元気な声を発するようになった。

このほかにも講師は子どもたちに、曲が盛り上がる直前に手を拳にして突き出しながら「ヘイヘイ」と声を上げることや、曲の最後で自分の好きなポーズを決めるなどを提案していった。楽器演奏に声や身体のパフォーマンスが加わると、演奏者自身も気分が盛り上がり、演奏も活気づく。子どもたちにとっ

ての演奏や発表の楽しさは、音楽以外のこうしたパフォーマンスにも大いに影響されるということを講師の実践から改めて理解できた。

### (3) 発表

ステージと客席の間には仕切りではなく地続きであったが、講師は子どもたちをステージ側に移動させ、客席側に顔を向かせた。それは子どもたちに、いよいよ発表会が始まること、講師や学生とともに演奏者の一員として、客席側の保護者や児童館のスタッフの方々に聞いてもらうということを自ずと知らしめた。準備が整った後、講師の「今から松阪カホン隊による発表会を行います。曲は『勇気 100%』です」という挨拶により、ピアノ担当の学生が和音を弾いて子どもたちにお辞儀を促した。会場からの拍手の後、カホンに座った子どもたちはスポットライトを浴びながら、練習のとおりにリズムを叩き始めた。曲の途中では講師の合図に合わせ、リズムパターンを見事に変化させて叩いている。そして最後にポーズを決めて静止すると会場から大きな拍手が沸き起こり、講師の呼びかけによりそれはアンコールの手拍子へと変わっていった。アンコールとして同じ曲をもう一度演奏することになったが、「最後のポーズを違うものにしよう」という講師の提案のもと、お辞儀から仕切り直して再び演奏曲に臨んだ。アンコールという形式はコンサートの醍醐味の一つであり、子どもたちがステージに上がる際には必ず体験させたいことのうちの一つと捉えていることを、講師との後日談で知ることとなった。

## 4. 実践後の学生の振り返り

### (1) 自己評価について

実施後のゼミナールの授業においてビデオ検証をしながら、学生 15 名に実践の振り返りを行わせた。振り返りシートは活動内容とねらい（表 1）に対して「とてもよくできた」～「全くできなかつた」までの 4 件法で回答し、その理由を記述させる方式（匿名）を探った。これらの回答内容を学生自身に分析、考察させることで一人一人の体験をチームとしての学び合いに昇華させる必要がある（山本 2018）ことから、シートの提出後、「KJ 法による分析」「考察」「報告書作成」「発表」のための時間 5 コマ分を実践後の授業内に設け、自分たちの学びや課題を皆で共有できるようにした。今回の学生の自己評価の結果の中で特に顕著であるのは、前回（2017）までのイベントの取り組みにおける学生の自己評価に比べ、否定評価が減少し、肯定評価が上昇している点である。例えば演奏活動に関する項目「オープニング演奏」「練習」「発表会」に対する実践の自己評価結果（図 3～5、いずれも n=15）には前回までのイベントの取り組みには必ず見られていたような否定評価は見られず、すべての学生が「とてもよかつた」「まあよかつた」の肯定評価を付けている。評価の理由（表 2～4）を見ても分かるように、音楽の専門家による的確な演奏指導と安定した音楽パフォーマンスの提供は、学生たちに安心感と客観的な態度をもたらし、講師の指導方法や子どもたちの様子を観察したり、自分たちが子どもたちにどう見えていたらよいかを考えたりする余裕を生み出す効果があったと思われる。

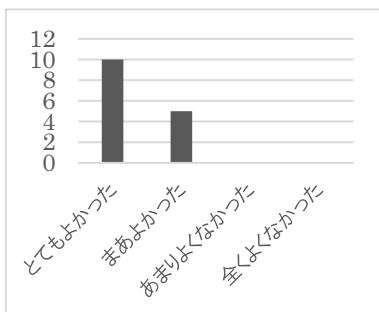


図3 オープニング演奏への自己評価

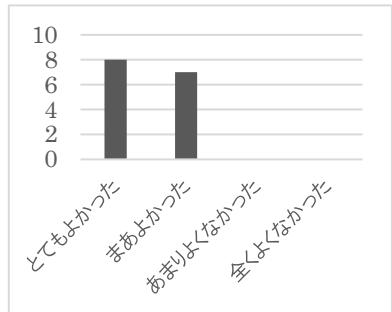


図4 練習への自己評価

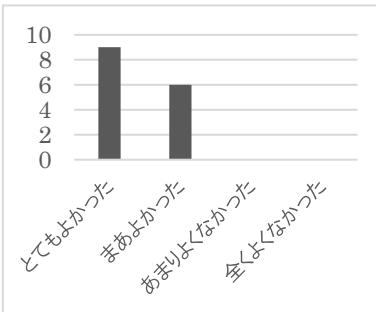


図5 発表会への自己評価

表2 図1の回答理由

- 【とてもよかった理由】**
- ・講師のモデル演奏がとても印象的だった。話し方も上手で子どもも保護者も楽しそうに聞く姿が見られた。
  - ・講師の進行のおかげで私たちも笑顔できちんと子どもたちの方向を見ながら楽しんで演奏することができた。
  - ・8ビートでわかりやすく、子どもたちにもなじみやすかった。
  - ・オープニング演奏を取り入れることで子どもたちに期待を持たせられた。
- 【まあよかった理由】**
- ・カホンの音が思いのほか大きく、ピアノ伴奏が小さく聞こえ歌声が届いていなかった。

表3 図2の回答理由

- 【とてもよかった理由】**
- ・自分の作ったカホンを楽しそうに鳴らす子どもの姿を見ることができた。
  - ・講師がリズム練習だけでなく、手を挙げさせたり声を出させたりして楽しい雰囲気づくりができていた。
  - ・子どもたちの反応に応じて私達も反応し、楽しい雰囲気を作ることができた。
- 【まあよかった理由】**
- ・子どもと少し離れた場所で対面して座っていたので、左右の手を入れ替えて示したり、叩けていない子どものそばで教えてあげたりすれば良かった。

表4 図3の回答理由

- 【とてもよかった理由】**
- ・演奏中、子どもたちは生き生きとして、「ヘイヘイ」と楽しそうに言っていた。
  - ・2つのリズムをきちんと使い分けで演奏できている子どもが多くいた。リズムが変わると講師が声をかけていたので止まることなく演奏できた。
  - ・私達も事前練習により、明るく楽しそうな表情で演奏することができた。
- 【まあよかった理由】**
- ・学生の歌声が小さかったから。
  - ・アンコールで飽きてしまっている子どももいたので、時間配分や曲数を増やすなどが必要。

## (2) 音楽の専門家との協働から学んだことについて

「音楽の専門家との協働から学んだこと」についての自由記述の分析と考察を担当した学生は、その指導方法の特徴として、「繰り返し覚えるリズム奏法」「身体表現による伝わりやすさ」「ほめる＝伸びる」「プロ目線での関わり」の4つを挙げている。憧れや目標を持たせながら意欲喚起し、身体性を意識させて反復練習を行うことは、限られた時間や関係性の中で子どもたちに演奏体験を能動的に促すための理にかなった方法と言えるであろう。これについて講師との後日談では、意識的に行っているのは「音楽の楽しさを伝えるための雰囲気づくり」であり、そのために「子ども一人一人と目を合わせること」により、彼らが楽しんでいるかどうかの反応を見ながら進めている、との見解を得ることができた。

学生の自由記述には表5左欄に示すような文面が見られた。これらを筆者が概念化したものが表5右欄であるが、これらを一人の学生の気づきとしてまとめると、およそ次のように集約することができる。

「専門家の洗練された能力や技能、音楽指導法により、子どもたちのポジティブな変容を目の当たりにした学生は、その意義や効果を実感することとなった。『子どもがどこまでできるのか』『どうすればできるのか』という楽器習得の音楽発達観と指導観を新たに構築し、それを踏まえて子どもとの関わり（ここでは間接的な関わり）を試みた。これらの実践は学生に子どもに必要な音楽体験の在り方について考察させ、その実現可能性について保育現場との関わりから糸口を見出すことを促した。さらに今後、専門家と学生（保育者）とがよりよく協働するために必要な課題をも導き出すことができた。」

表5「音楽の専門家との協働から学んだこと」に関する自由記述の抜粋とその概念化

学生の自由記述（抜粋）	筆者による左欄の概念化
①講師の先生は私たちとはカホンの叩く音が違いきれいだと思った。	専門家の能力や技能を知る。
②子どもたちへの働きかけ、演奏すべてが素晴らしい、とても真似できないが学ぶことが多かった。	専門家による音楽指導を知る。 子どもの変容に気づく。
③自分たちでは気づくことのできない視点で子どもとの関わりを持つことができた。	新たな音楽発達観・指導観を踏まえて子どもと関わる。
④音楽が好きな子どもはより好きになり、苦手な子どもは少しでも好きになるような貴重な体験だったと思う。	子どもに必要な音楽体験について考察する。
⑤保育の場に専門家も来てもらい、楽器制作は難しくてもプロの演奏を聴くだけでも楽しいと思う。	子どもに必要な音楽体験を保育現場との関わりから見出す。
⑥制作手順が統一されていなかったり、演奏時間が長かったりして疲れている子どももいた。事前にもっと打ち合わせをすることによりアクシデントを減らすことができると思う。	専門家と学生（保育者）との協働的な取り組みに必要な課題を見出す。

## (3) 保護者アンケート結果からの考察

イベント終了時に、今回のイベントに対する保護者対象のアンケート調査を実施し、19件の回収を得た（n=19）。「イベントの内容」（図6）と「学生の進行や対応」（図8）については4件法による評価とその理由を訊ねたところ、イベントの時間配分、制作方法の統一、楽器の耐久性の点で改善課題はあるものの、どちらも概ね肯定的な評価を得られた。「子どもが楽しんでいた活動」（図7）については選択肢の中から複数回答可で答えてもらったところ、「楽器制作」のみならず、演奏に関する項目である「楽器練習」「講師演奏」「発表会」「オープニング演奏」への回答も一定数得ることができた。前回までのイベントの取り組みに対する同様の保護者アンケート結果では、「楽器制作」に評価が集中していたので、今回の調査結果は注目に値する。この調査は保護者を対象に実施したものであるが、音楽の専門家による音響の提供と演奏指導は、子どもの参加意欲を高め、演奏体験を能動的に促す上で大きな効果をもたらすことができるだろう。

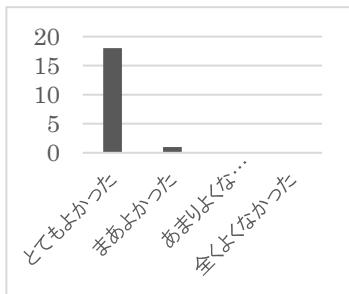


図6 本日のイベント内容

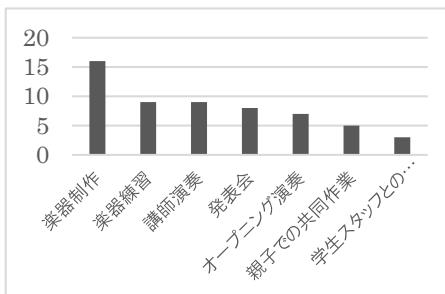


図7 子どもが楽しんでいた活動

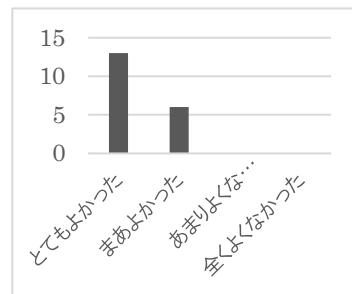


図8 学生の進行や対応

表6 本日のイベント内容に関する回答理由

【「とてもよかったです」理由】
・思っていたより簡単でいい音だった。
・楽器を作るだけでなく1曲演奏できるところまで教えてもらい、家に帰っても楽しめる。
・子どもがノリノリで楽しんでいたから。
・子どもがすごく楽しみにしていたが期待以上だった。カホン奏者の方のファンになった。
【「まあよかったです」理由】
・3歳の子どもに2時間は少し長かったかな。

表7 学生の進行や対応に関する回答理由

【「とてもよかったです」理由】
・1対1で丁寧に親切に対応してもらい、とても分かりやすかった。
・楽しく進行してもらい、子どもも喜んでいた。
【「まあよかったです」理由】
・演奏時間はもう少し短くてもよい。
・作り方の説明が学生によって違い混乱した。
・5歳の子どもが座るとつぶれてしまうので座面の補強が必要。

## 5. 本実践の構造と意義を理論的に探る

今回実施した、保育者養成課程学生とプロの演奏家との協働的な取り組みによる手作り楽器の制作と演奏活動の企画実践の構造と意義を、「音楽アウトリーチ」と「文化的実践としての学び」との考え方から解釈を試みたい。

### （1）音楽アウトリーチ活動とは

林（2013a）によると、アウトリーチ（outreach）とは英語で「手を伸ばすこと、差し伸べること」を意味し、元来は社会福祉の分野で一種の啓発活動、教育普及活動という意味で用いられてきた。このことから、音楽分野におけるアウトリーチとは、「音楽家や音楽団体・機関が、普段音楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及すること」であり、「音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的な活動がスタンスの特徴」とされる。このような活動が1990年代後半に日本で積極的に行われるようになった背景として、林（2013a）は次のような複数の経緯を挙げている。

- ①1998年告示の学習指導要領において、総合的な学習や中学校での和楽器の学習が導入され、外部の音楽家が授業に協力する機会が増えた。
- ②1980～90年代に公立文化施設の急増に伴い音楽活性化事業の取り組みが活発になった。
- ③1998年のNPO法施行によりアウトリーチの供給側の幅が広がった。
- ④オーケストラなどの演奏団体が存続をかけて聴衆開拓に踏み出していた。
- ⑤2001年ごろから音楽大学や教育養成大学音楽科において、卒業後を見据えたキャリア教育や大学の地域貢献を目的として、アウトリーチ活動が活発化した。

①に関して、林（2013a）は「学校に外部の人材が導入されることによって新たなスタイルの学びが誕生した」として、「教師・子どもの二者関係」から「子ども・教師・音楽家の三者関係」による学びへの変容を図9・10のように示している。そして、学校におけるアウトリーチでは、これら「三者のコラボレーションに着目しながら実践することによって、新たな学びの可能性を生み出すことができる」と述べている。また、⑤に関して、教員養成大学による音楽アウトリーチ活動としては、滋賀大学（林2013b）を始めとして複数の国立大学での実践例が報告されている。それらは主に、専門的な音楽技術を提供できる教員養成課程音楽科の大学教員や所属学生によって進められている。実践例では「音楽を通して学校と地域に貢献できる学生を育成する」ことを目的に、保育や教育現場、病院や施設でのコンサートの企画実践を通して、学生たちに「教育実習とはちがったスタンスでの音楽や子どもとのかかわり」（林2013b）や「音楽の専門性とそれに基づく指導力、コーディネート力、コミュニケーション力」（管ほか2005）を学ばせることに重点が置かれている。これらの場合、学生が音楽家の役割を果たすので、学びの関係図は図10にほぼ等しいと言えるだろう。

一方、保育者養成大学の場合は、本稿で示したような外部の音楽の専門家と学生との協働による音楽アウトリーチ活動の事例というのは数例を除いてほとんど見当たらない。代わりに、子育て支援の場における学生の音楽的な活動の企画実践、例えば手遊びや保育教材などの実践例は多く見られるが、これらの実践では音楽技術というよりもむしろ、音楽を通して親と子の関わりや親子との関わりを育むことが求められる。また保護者や子育て支援のスタッフとの関係性も含まれてくるため、本稿での取り組み

とは趣旨が少し異なってくる。

これらのことと鑑み、本稿での取り組みにおける人々の関わりの様相を先述のような関係図として描くならば、図11・12のような図を考案できるのではないかと考えた。図11の下部「学生・音楽家・教員」は実践前の企画や準備や実践後の振り返りにおける関わりを示し、上部「子ども・学生・音楽家」は実践当該日の関わりを示している。今回の取り組みで特に重要なのがこの上部三者の関わりであり、これらの「三者のコラボレーション」によって少なくとも学生にはこのような取り組みでしか味わえない貴重な学びがもたらされたことは先述の通りである。また、このイベントでは制作や発表会に保護者も参加していることや、広報や参加者受付など企画段階から児童館スタッフがサポートを担っていることを踏まえると、新たに図12のような関係性を描くこともできるであろう。

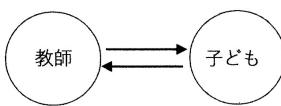


図9 従来の教師と子どもの関係図（林 2003a より）

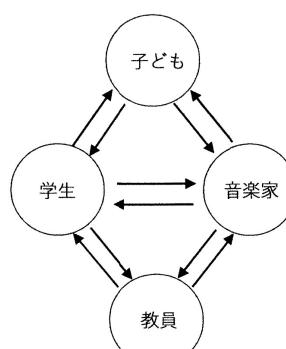


図11 今回の取り組みにおけるアウトリーチの関係図

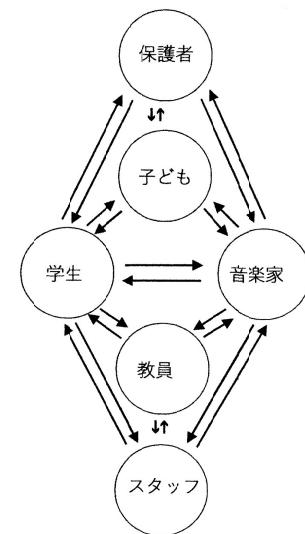


図12 図11をさらに発展的に捉えた場合のアウトリーチの関係図

## （2）文化的実践としての学び

今回の取り組みでは「楽器の文化性」に着目し、手作り楽器の活動にプロの演奏家を起用することで、子どもたちの演奏体験を能動的に促すとの効果を得ることができた。発案の過程では、修練された技術をもとに素晴らしい演奏を聴かせる大人たちの姿に憧れ、その音楽文化の実践共同体に参加してみたい、学んでみたいという意識を子どもたちに芽生えさせることが重要であると考えた。これは、J.レイヴとE.ヴェンガーの示す「正統的周辺参加」論による「状況に埋め込まれた学習」（1993）の考え方を援用したものである。今回のイベントは2時間程度の限られた関わりにはなるが、この学習理論からその取り組みを振り返ると、カホンを中心とした音楽文化の実践共同体に、学びの「師」（親方・熟練者）としての演奏家があり、知的探求の「先輩」（古参者）としての学生があり、初めてその共同体に参加する「当事者」（弟子・新参者）としての子どもがいる、という構図（図13）を描く

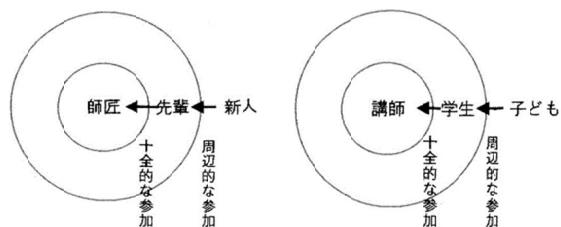


図13 「状況に埋め込まれた学習」（左図）を今回のイベントに照らし合わせて発展的に捉えた場合（右図）

ことができる。紙面の都合上、あくまでも試論の域を超えることはできないが、このような学習の可能性を想定しておくことは、学生自身においても自分の立場を理解し、子どもとの関わり方をより明確にする上で大きな助けとなろう。

## 6. 今後の課題 – 子どもの学びについて –

今回の取り組みにおける学生の学びについては本稿で述べたとおりである<sup>3</sup>が、そもそも実践の対象者である子どもについては、このような活動への参加を通してどのような学びが促されるのであろうか。アウトリーチがもたらす教育的な効果に関して、一般財団法人地域創造が実施した調査研究（2010）によると、アウトリーチを実施した学校の教師は、アウトリーチの活動は子どもたちに「感受性」「表現力」「想像力」「コミュニケーション能力」「創造力」等の育成への効果があると回答した。また同財団による英仏独米の4か国への海外調査においては、教育と連携したプログラムの効果や子どもたちが身に付けられる能力として「自己の回復、自己肯定感」「創造力、想像力、批判的思考力」「社会性、協調性、グループワーク、責任感」「基礎学力の向上、他の教科との連携」などが挙げられている。報告書ではさらに、アウトリーチ活動における継続的・長期的なプログラムと単発的・集中的なプログラムとの違いにも触れられており、継続的なアウトリーチ活動は「参加者の内面的な変化や様々な人間関係に変化をもたらし、そこに関わる人々に新しい風を吹き込む可能性がある」との指摘も見られる。

今回の筆者らのイベントに参加していた親子の保護者から後日、「家に帰ってからも子どもが『パパ、楽しかったね』と言って姉妹でカホンを叩く姿が見られた。叩きすぎて今ではボコボコになっているけれども、あの子たちにはよほど心に残る体験だったのだろう」との話を聞くことができた。この話に見られるように、今回のような単発的なイベントであっても、参加した後に子どもや親子にどのような変容が見られ、どのような関わりが生まれるのかということこそが、このようなイベントの留意すべきもう一つの目標であろう。それはつまり、音楽文化の実践共同体に一時的にでも参加した新参者が、これを機にどのような学びを繰り広げていく可能性があるのかという問い合わせもある。そして、このように参加者の学びや変容を具体的に捉えていくことは、地域と大学の連携や協働の実践を評価する上でも必要なことである。

「音楽にはたくさんの出会いがあると私は思う。今回のイベントでは『楽器との出会い』『合奏との出会い』があった。普段触ることのない楽器（カホン）に触れ、独奏では味わうことのできないみんなとの合奏もあり、とても良い経験だった」という学生の感想にもあるように、今回のイベントを通して得たそれぞれの「出会い」は、果たして次なる「関わり」を生み出す機会になりうるのか、またどのような「関わり」が生み出されるのか。それらを捉える方法を探りつつ、プロの演奏家との協働による手作り楽器の活動を保育者養成課程学生とともに今後も継続して取り組んでいきたい。

### 註

1 2017～2019年にA短期大学保育士養成課程入学生444名を対象に実施したピアノ経験調査によると、「未経験」35%、「3か月以上3年未満」36%、「3年以上5,6年未満」22%、「幼少時～現在まで継続」7%という結

果であった。「3か月以上3年未満」の回答者には「大学への入学が決まった高校3年次に習い始めた」という例が多く、「未経験」の回答者と合わせると71%の学生がピアノの初心者として入学していることがわかる。ピアノ以外の音楽技術に関しては、吹奏楽部や合唱部での経験をはじめとして、若干名ではあるが、三味線や琴など邦楽の経験者も見られる。なお、本実践に参加する学生のゼミナールの所属は、入学当初に教員が学籍番号順に振り分けることにより決定される。音楽スキルの有無やレベルは関与しておらず、それは筆者のゼミナールにおいても同様である。

2 本研究における調査実施と結果考察に際しては、関係者に研究趣旨の説明と研究への協力依頼、個人情報保護の倫理的配慮を行った（高短研審第19-2号）。

3 高等教育の観点からアウトリーチ活動を考察した井上（2017）は、アクティブラーニングと音楽によるアウトリーチ活動の共通点として、「能動的かつ主体的な学習活動である」「体験型学習を伴う教育活動である」「音楽教育としての意味を持ちながら地域連携及び地域貢献として位置づく」の3点を挙げている。

#### 引用文献

- ・山本敦子（2017）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（1）—学生の実践の振り返りをもとに—」『高田短期大学紀要第35号』:59-71
- ・山本敦子（2018）「児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践における保育者養成課程学生の学び（2）—楽器の特徴や活動対象年齢の分析をもとに—」『高田短期大学紀要第36号』:29-40
- ・山本敦子（2020）「子どもの手作り楽器活動における演奏体験を能動的に促すための試み（1）—保育者養成課程学生による絵本を用いた実践より—」『高田短期大学紀要第38号』:11-22
- ・丸山慎（2016）「第3章第2節 環境の中のモノとかかわる、音とかかわる」日本赤ちゃん学会（2016）『乳幼児の音楽表現 赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規:54-55
- ・村上康子（2016）「第3章第8節 楽器は音楽文化との出会い」日本赤ちゃん学会（2016）上掲書:68-69
- ・J.レイヴ、E.ウェンガー（1993）佐伯伸訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書
- ・林睦（2013a）「音楽教育におけるアウトリーチを考える」日本音楽教育学会編『音楽教育実践ジャーナルvol.10 no.2』:6-13
- ・林睦（2013b）「教員養成大学における地域と連携したアウトリーチ活動—滋賀大学での8年間の実践をもとに—」関西学理研究会編『関西学理研究第30号』:225-234
- ・管道子、山名敏之（2005）「教育学部における総合的な芸術普及活動の授業の試み—知的障害養護学校における参加型音楽コンサートづくりを事例として—」関西学理研究会編『関西学理研究第22号』:49-63
- ・井上幸一（2017）「アウトリーチとアクティブ・ラーニングについての考察(1)高等教育における音楽によるアウトリーチ活動」『福岡女子短大紀要82号』:13-21
- ・一般財団法人地域創造（2010）『文化・芸術による地域政策に関する調査研究』報告書、資料編①「アンケート調査」、資料編③「海外事例調査」

#### 謝辞

本研究で取り上げたイベントの実践に際し、関係者の皆様に多大なるご協力をいただきましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。